

2024 年度数理・データサイエンス・AI 教育プログラム
自己点検・評価について

1. プログラムの履修・修得状況

本プログラムは基盤教育科目（選択科目）として、2022 年度以降入学生を対象に全学に開講している。本年度の履修・修得状況は以下のとおりである。

<履修対象者のうちのプログラム履修・修得状況>

学部・学科	履修対象者数	履修者数	修了者数
リベラルアーツ学部	361 名	6 名 (5 名)	5 名 (4 名)
人間科学部心理学科 総合心理学部総合心理学科	359 名	21 名 (16 名)	17 名 (15 名)
人間科学部食物栄養学科（健康実践栄養士課程） 食環境学部食イノベーション学科	323 名	0 名	0 名
人間科学部食物栄養学科（管理栄養士課程） 食環境学部管理栄養学科		15 名 (11 名)	11 名 (8 名)
2024 年度 計	1366 名	42 名 (32 名)	33 名 (27 名)

※履修対象者数：1・2・3 回生のうち「データサイエンス・AI 概論」修得済の学生を除いた人数

※履修者数・修了者数のうち、（ ）内は 1 回生の人数

プログラム終了時に行った授業アンケート（別紙参照）では、「総合的に判断してこの授業に満足しましたか」という設問に対して約 90%の学生が肯定的な回答をしており、おおむね高評価を受けたと考えられる。プログラムの履修・修得状況および授業アンケートの結果はカリキュラム運営 WG に報告がなされ、ワーキングを通して各学科に共有されている。

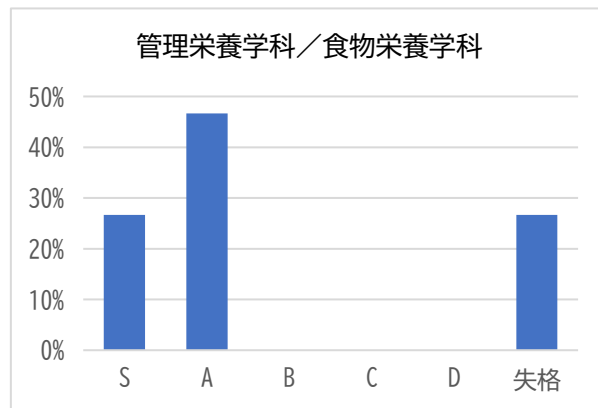
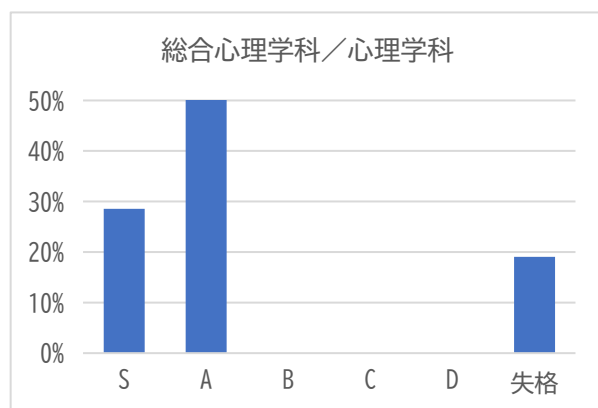
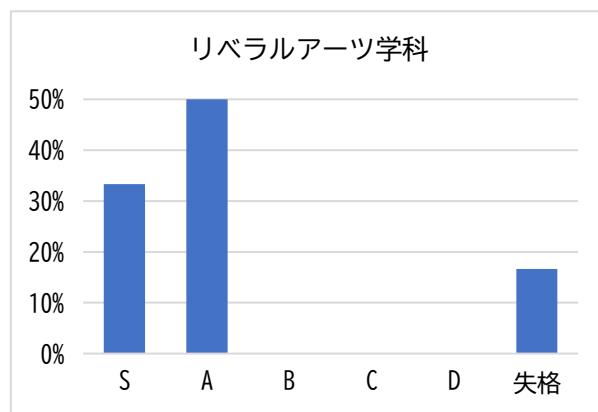
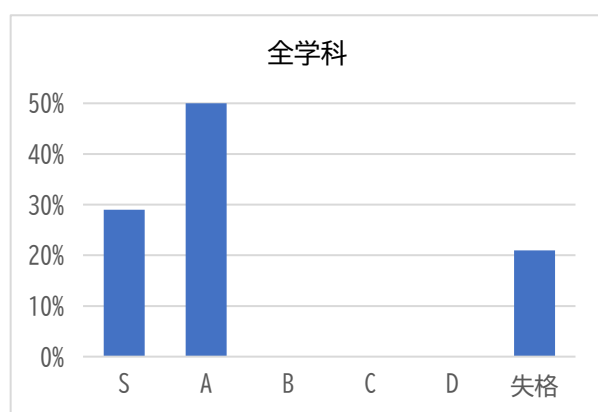
2. 学修成果

全 14 回の授業毎に実施するミニレポートにより、毎回の授業における学生の学修成果の振り返りを確認している。プログラムの終盤では、学んだ内容をもとに課題を設定し、解決策をまとめて成果発表するグループワークを実施するとともに、最終回には LMS を活用したオンライン上の到達度の確認を行い、学修成果を確認している。

また、カリキュラム運営 WG において、プログラムの単位修得率、成績分布の状況を共有し、学修成果の評価と今後に向けた改善方策を検討している。

<2024 年度「データサイエンス・AI 概論」成績分布>

評価	人数	割合
S	12	29%
A	21	50%
B	0	0%
C	0	0%
D	0	0%
失格	9	21%
合計	42	100%



3. 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

プログラム終了時に、履修者全員を対象にした授業アンケートを実施し、授業担当者、カリキュラム運営 WG、教学委員会において結果を共有し、授業改善につなげている。2024 年度より、本学のアセスメントプランの項目にも組み込み、全学的な PDCA サイクルの中でプログラムの改善に取り組んでいる。

また、プログラムの進捗に伴い、学期ごとに行っている授業受講に関する学生アンケートおよび卒業時調査、卒業後調査等を活用し、学生のニーズをふまえたプログラムの改善を図っていく。

4. 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

授業アンケートでは、他の学生への推奨度を問う設問は設定されていないが、授業アンケートの結果、約 90%の学生が本プログラムに対して高い満足度を示していることから、一定の評価を受けたと考えている。

2025 年度のガイダンスにおいては、本プログラムの概要及び実際にプログラムを終えた学生の声を紹介し、推奨科目として科目の紹介を行い、他の学生への履修を勧めていく。

5. 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

毎年 1%ずつの履修者増を目指しており、履修者数の推移は以下のとおりである。

<「データサイエンス・AI 概論」履修者数の推移>

年度	収容定員	履修者数	履修率
2022 年度	1,560 名	61 名	3.9%

2023 年度	1,480 名	54 名	3.6%
2024 年度	1,480 名	42 名	2.8%
2025 年度目標	1,480 名	60 名	4.1%

本プログラムが1回生配当科目であることから、大学案内においてプログラムの紹介を行うとともに、各学期のガイダンスにおいて、各学科の専門性とのつながりをふまえながら、活発な広報活動を行い、履修率の向上に取り組む。2025年度においては、履修者数60名を目標とする。

6. 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

2022年度よりスタートしたプログラムであることから、まだ卒業生を輩出しておらず、評価することができないが、2025年度にはプログラムを履修した学生が初めて卒業するため、その後に卒業生アンケート等を通して評価を行う予定である。

7. 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

大学の自己点検・評価および認証評価による評価の機会、また、AI事業を展開している企業との意見交換を通して、本プログラムの改善に反映させていく。企業との意見交換では、具体的に以下の意見が得られた。

①プログラム全体への意見

短時間の講義ではあるが、非常に密度の濃い内容だったと印象を受けた。各時限にグループワークを導入しアウトプットの機会を多く設定、ミニアンケートを実施することで疑問を残さず進めることができたことが大きな要因と推察される。

また、これまでの講義と異なり企業の実データを用いた講義を導入したことでより実践的な能力を身につけられたのではないかとと思われる。本プログラムは今後社会で必要なAIに関する知識を習得できる内容のため、多くの学生が受講すべきものであると考える。

②今後の改善点

講義全体としては非常に密度の濃いものとなったが、実データを用いた講義について、中途半端になってしまった印象を受けた。昨年度の反省を活かしグループワークを多く導入したが結果として、後半駆け足になってしまったためと推察する。1つのテーマを深掘り実施することで、より実践的な能力を身につけることができるのではないかと考える。

また、AIは発展分野で現在の教科書だと古い（不足）の内容があると考えられる。例えば、生成AI（プロンプト）について、使いこなせなければ、現在で言う所のExcel、Wordが使えないような状態になる可能性がある。アイデアの補足、文章の成形など、脳の拡張機能として生成AIとうまく向き合うことは、今後社会で必須スキルとなると考えられる。

8. 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させる工夫

各人の専攻に関わらず、データサイエンス・AIに関する基本知識を持っていることが、これからの社会を生き抜く上で不可欠になるため、その基礎を身につけ、実社会で実践できるようになることをプログラムの目的としている。

プログラムでは、身近にある様々なデータを実際に扱うことで、学び始めたばかりの学生にも親しみやすく興味を持たせる工夫をしている。また、生成AIを適切に利用する方法について学生が

主体的に考えられるように演習内容を組み立てている。グループワークや個別のワークを通して最新の技術を体験しながら学び、成果発表までを能動的に行うことで、学生の知的好奇心と達成感を高めるよう工夫している。

9. 内容・水準を維持・向上しつつ、より「わかりやすい」授業とする工夫

授業アンケートや各種の評価、企業との意見交換、授業公開等の取り組みを通して、学生にとってよりわかりやすい授業の検討を行っている。また、今後は学内のアセスメントプランの項目に組み込み、全学的な内部質保証システムに従って自己点検・評価をしていく。

以上